

教師教育の新たな挑戦！ 宇大教職大学院、始動！

平成27年4月、宇都宮大学に大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)が開設されました。県内各地区から集まった現職派遣教員10名、附属小から現職教員1名、学部卒3名の院生14名でのスタートとなりました。

知的好奇心にあふれ、飽くなき探究心をもった院生14名が教職大学院を舞台にして、連日、実践に即した多彩な学びを繰り広げています。教育実践力を一層高めるために、挑戦的な取組を院生・教員一丸となって展開しているところです。

◆なぜ教職大学院なのか？

近年の社会の急激な変化に伴い、教員養成分野についても、大学院段階で養成されるより高度な専門的職業能力を備えた人材が求められています。複雑・多様化する課題を抱える学校で、大きな変化や深刻な諸課題に対応する高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が、従前以上に求められてきているのです。

このため、教員養成教育の更なる充実を図るべく、高度専門職業人養成としての教員養成に特化した専門職大学院としての枠組み、すなわち「教職大学院」制度が創設されました。

そういった中であって、宇都宮大学は教職大学院をこの4月に立ち上げました。学校現場とつながり続けてきた今までの財産と、県教委との連携とを基盤にしなが、栃木のリーダーとなり得る教員の養成を始めたところです。



◆どんな学びを展開しているのか？

教職大学院は、現場ですぐに通用する実践的能力を高めることが目的ですから、教育システムもそれに沿ったものとなっています。教育内容は、「教育課程の編成・実施」「教科等の実践的な指導方法」「生徒指導・教育相談」「学級経営・学校経営」「学校教育と教員の在り方」の5領域を中心に編成され、講義だけではなく、事例研究・模擬授業・授業観察等の演習形式の授業を重視しています。

また、宇大教職大学院の中核は、連携協力実習校での長期実習である「教育実践プロジェクト」にあります。院生と大学教員がチームとなって、実習校に赴き、連携しながら課題解決を進めることで、学校現場で確実に生きる実践

力を身につけます。こうした実践的な教育機能を充実させるために、専任教員に占める実務家教員の割合を4割以上にしていることも教職大学院の大きな特徴です。それだけ実践力を重視している大学院なのです。

《専任教員が語る教職大学院の魅力》

※カッコ内は主な担当科目

◇松本 敏 教授【専攻長】(授業研究・社会科教育等)

* 望ましい教育には既定の正解がありません。対等な議論によって近づけるだけです。その方法を学ぶ所です。

◇青柳 宏 教授(授業研究・カリキュラム開発等)

* 真つ正面から一人一人に向き合い、その息吹に触れ、共にこれからの教育を考えられる、それが魅力です。

◇石嶋 和夫 特任准教授(集団づくり・個のとりえ方等)

* 自らの教育実践を省察しながら振り返り、院生と教員が語り合い、学び合う中で、解決の糸口が見いだされます。

◇小野瀬善行 准教授(学校改革・学校評価等)

* 理論と実践の往復や仲間との議論により、自ら教師として成長すること、学校改革に参加できることが魅力です。

◇久保田善彦 教授(授業改善・個に応じた指導等)

* 教職大学院は、教育実践(これまでの実践や実習)を丁寧振り返ることで、現場に即した理論を作ります。

◇近藤 秀人 准教授(生徒指導・国語教育等)

* 体験・参加型で真の実践力を鍛えることができるのが、教職大学院です。力のあるスクールリーダーを育てます。

◇司城紀代美 准教授(特別支援教育・現代教師論等)

* 教職大学院は、日々の実践を振り返ることで新しい「知」を生み出すことができる、創造的な場です。

◇原田 浩司 准教授(特別支援教育・個に応じた指導等)

* 発達障害児のアセスメントや指導法について学校を支援しながら研究ができる画期的な大学院です。

◇人見 久城 教授(理科教育・授業実践等)

* キャリアパスの異なる大学院生が、専攻教科を超え、個を尊重しながら、協調的に成長しています。

◇日野 圭子 教授(数学教育・教材開発等)

* 実践の中で考えることと、理論を学ぶことがとても近くにあるところが、教職大学院の魅力だと思います。

◇和井内良樹 准教授(道徳教育・カリキュラム開発等)

* 優れた実践について学び、院生各自の指導経験も交えながら、とても有意義な議論を行うことができました。

◇渡辺 浩行 教授(授業分析・英語教育等)

* 還暦を過ぎての教職大学院。お陰様で幼子の好奇心が蘇り、楽しく院生と学び合い、還を体験する日々です。

※専任教員以外に多くの兼任教員が教職大学院に関わっています。

「社会の激変に対応できる教師教育に」 教育実践高度化専攻長 松本 敏

昨年、20年のうちに今ある職業の半が無くなるという予測が世界を驚かせました。今の小学生の3分の2は今無い職業に就くだろうという予測もあります。コンピュータや人工知能、それにロボットの進歩と普及によって、社会はこれまでにないスピードで変化しています。当然、子どもたちが身につけるべき知識や能力も、従来のままでは役に立ちません。暗記の知識や誰もが知っている解法だけではそのような社会を生き抜くことはできません。はじめて出会う問題に取り組み、チームで知恵を出し合って議論し、当面の最適解を出しながら行動し、その成果を的確にモニターして次の問題発見や解決に向かう——そういう人材を育てるために必要な教育の革新が、すべての学校・すべての教員に求められています。

宇都宮大学で開設した教職大学院(教育学研究科教育実践高度化専攻)は、全国で26番目、国立だけでは21番目です。平成28年度からは、全国の国立大学の教育学研究科がほぼ一斉に教職大学院に移行します。これまでの修士課程がなくなるところも多いようです。

それはなぜかという、上に述べた教育の革新を担える人材を育てたり鍛え直したりするために、教師教育の大変革が必要だからです。

宇大の教職大学院は、各々の経験を基に徹底的に議論する大学での授業と、学校現場の生きた課題をその学校の先生方と共に探究し解決する実習科目「教育実践プロジェクト」を2つの柱に、それらをつなぐ毎週の「リフレクション」によって経験を確かな知恵に高めようという学びの場です。この濃密な学びのようすをぜひ見に来てほしいと思います。

(次号から、このコーナーは、教育関連のキーワードを宇大教職大学院教員が、わかりやすく執筆します。)

《シリーズ:教職大学院授業紹介①「生徒指導の実践と課題」(共通科目[前期])》

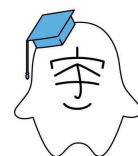
この授業は、生徒指導に関する事例検討等とおして、子ども理解の方法や学校の指導体制づくり、更には地域や関係機関との連携について検討してきました。とりわけ、現職院生は、自らの生徒指導の実践を省察し、自分の行ってきた手法とは異なる手法や、その背景となる理論を手に入れることに力点を置いてきました。

そのため、授業の前半では、全ての院生が自らの実践等で、どこか心に引っかかりを感じている生徒指導の事例を発表し、実際には、どう実践することが望ましかったのかについて多角的に議論してきました。課題のある行動等に対しての効果的な対応だけではなく、児童生徒一人一人に社会の形成者にふさわしい力を保障すること等にも議論が及び、実に豊かな学びを展開することができました。



授業の後半は、まず少年院で行われている実践と少年達の心の育ちをDVDで視聴しました。その後、河合隼雄著『大人になることのむずかしさ』(岩波現代文庫)を全員で読み進めて行きました。授業前半の一人一人の実践の「リフレクション(省察)」を、少年院の実践と河合隼雄の本を通してさらにリフレクションする、いわばリフレクションのリフレクションです。例えば、この本の中に「教師や指導者は、自らが若者に殺されることによって、その真の指導がなされることを知るべきである」という印象深い一節があります。まさにこの一節に全員で向き合い、語り合い、一人一人がこれからの自らの「課題」を見い出すことが出来たのではないかと思います。

(担当教員:青柳 宏、近藤秀人)



【編集・発行】宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。